

## シドッチ上陸記念の碑



江戸時代中期、イタリア(シチリア島パレルモ市出身)人、イエズス会 宣教師 Giovanni Battista Sidotti ジョバンニ・バチスタ・シドッチ(1668~1715)は、ローマ法王の命を受け、六代將軍徳川家宣の寶永五(1708)年10月1日に髷まげを結び、紋付き・腰には大小の刀を差した侍姿で、屋久島(現在の鹿児島県)の屋久島小島恋泊の南、唐の浦(浦崎)に上陸しました。しかし、不幸にも捕えられて、薩摩藩から長崎奉行所で再度取り調べを受け、其の後江戸表に護送され、小石川の宗門改所である切支丹屋敷(山屋敷)に幽閉されました。当時、シドッチの訊問にあたった新井白石は、訊問で得た知識を基に『西洋紀聞』『采覧異言』を著わしました。彼シドッチは、白石の「武力侵略の恐れなし」との進言により、刑死を免れ「山屋敷」に二十両五人扶持の優遇で囚禁されていましたが、彼の世話をする牢番長助・はる夫婦夫婦の受洗が発覚し、地下詰牢厳囚の処分を受け、正徳五(1715)年10月21日、47歳で牢死を遂げています。



## シドッチ上陸地

これらの著述は、鎖国の時代に世界の事情を紹介した最も早期のもので、ヨーロッパのキリスト教の教義、道徳の価値を否定する一方、その西洋の知識、技術の優秀性を認めており、八代將軍吉宗自らがこの内容に触れたこともあって、西洋の書を読むことが奨励され、日本人がヨーロッパ文化に対して抱いた観念の起源をなすものとなりました。



シドッチ神父上陸記念碑入口



サンタマリア教会



シドッチ上陸記念碑



■提供：写真/文 アースリーカンパニー

補注

※「江戸のサンタマリア」の歌詞二番から三番には、シドッチのことが謡われています。

二、まぼろしのおだ巻の糸 くりかえし 昔を今に うかび見る  
とうとき姿 あゝ 江戸のサンタマリア

三、船の名は**サントリニクス** 渡り来る  
伴天連 (パドレ) シドッチ 山屋敷  
最後の客の 示しける サンタマリア

ここで、彼が乗ってきた船名「**サントリニクス**」の名が知られています。

また、白石はこの聖母像の絵について、スケッチの横に「此女の像、年の比四十ちかきほどニ見えて鼻みねたちてうるはしき面躰也…」と書きとめている。

重要文化財(独立行政法人国立博物館(東京国立博物館保管)蔵)・長崎奉行所キリシタン関係資料のうち聖母像(親指のマリア)

江戸時代のキリシタン探索に用いられた踏絵類と、宣教師や信徒が持っていた聖画像、キリスト像、マリア観音像、十字架等の信仰関係の遺品からなる。この**聖母像は江戸時代中期に日本に潜入したイタリアの宣教師シドッチが携えていたといわれる**。彼が携えていた品物は、「いこくじんしまちいたしきうらふおほぶくろ 異国人致所持候大袋ノ内諸色之覚」によると、ミサ典書・カズラ・カリス・パテナ・聖遺物・アルバ・スルプリ・聖香油・十字架などミサに用いる一式の外、キリスト像・聖母マリア画・聖務日課・ロザリオ・ディシヒリナ・教理書などであった。

※切支丹屋敷(山屋敷) 茗荷谷の深い谷から「きりしたん坂」を上った住宅街の一角がその屋敷跡と云われています。今は、記念の石碑と、夜になると泣き声がするという八兵衛石なる自然石が残されているばかりであります。

また、間宮士信は、天保年間居住していた江戸小日向に、寛永から寛政年間にかけて「山屋敷」と呼ばれたキリシタン屋敷があり、士信は、『小日向志』にこの屋敷内の略図をはじめ、収監され死亡したキリシタンのことなどを記録しています。



※『西洋記聞』せいようきぶん。江戸時代、新井白石が書いた西洋の研究書。三巻。▽キリスト教布教のために密航したイタリア人宣教師シドッチを訊問した白石が、その内容をまとめたものである。ヨーロッパ諸外国の歴史・地理・風俗やキリスト教の大意と、それに対する白石の批判などが記されている。◇1715年ごろに完成したが、キリスト教に関する記事があるため、1882(明治15)年にはじめて世に出版された。

※シドッチと白石の二人の出会いを現代の作家が歴史小説とした作品は、[藤沢周平の『市塵』\(1989年 講談社刊\)](#)、秦恒平の『悲しみのマリア』などが知られています。

※[小川小百合編「イタリア人宣教師シドッチ Giovanni Battista Sidotti に関する欧文史料」](#)

※[書簡関係資料一覧](#) (1778(安永7)序文 佐久間維章編『邏媽人款状』(長崎奉行所蔵『華夷変態』より採録編集)長崎奉行所蔵『華夷変態』よりシドッチ関係のものを採録編集)



